一、現時点での日本の政治と文化の位置

『言う迄もなく一八六七年以降、一九四五年に到る時期と、一九四五年以降の時期とは、我々にとって異った意味を有する。明治維新以降我国の直面した問題は、封建社会から如何に近代社会を形成するかという事であった。そこに於て必要なものは、西洋近代社会の産物―制度と慣習と技術・学芸・宗教・道徳等物質的文化に於ても、精神的文化に於ても―の輸入であり、それを

如何に日本の社会的構造変化の礎とするかという事であり、日本在来の文化と如何に融合させていくかという事であった。即ち近代の咀嚼であり、近代の相剋と超越の問題である。

東洋が西洋と対決した際に、即ち東洋が近代化の過程に入った時に東洋各国が等しく迎えたのは文化的遅滞（Cultural Lag）現象である。そして我々は一九四五年を体験した。

然るに二十世紀半ばを過ぎた現在、我々の直面する問題は各国特有の歴史的・文化的・社会的・経済的条件に基く近代化現象が世界的総合社会の形成過程の中にある事である。いわば近代の内包する現象が世界的関連性をもって起生消滅する。日本は近代を咀嚼せざる中に現代的課題の中に直面している。今や個人にとっては近代的自我の確立という問題と共に、機械の人間化か人間の機械化かという言葉によって端的に示されるテクノロジーによる個人のモナド化の時代をも迎えている。

この時に当って政治学と政治理論は何をなし得るか。

終戦後我々は初めて「下降型」でなく、「上昇型」の政治形態をもった。然し我々は現在の政治の意味について探求を怠ってはならない。我々は常に新しき人間と社会を凝視せねばならない。我々の登らなければならない山は険しいがしかもそれに対して少しづつ登っていく事を一九五七年の初めに当って共に誓おうではないか。（政治学会学術研究部）』

以上は私が昭和三十二年の正月に慶大の法学部政治学会誌の巻頭言として書いたものである。